

# 「敬語」をどうとらえるか

熊谷智子（国立国語研究所）

## 1. はじめに

言葉による待遇行動の研究は、ここ20年ほどの間にも多様な広がりを見せてきたといえる。狭義の敬語を対象とした従来の研究に加えて、ポライトネス理論(Brown & Levinson 1987)によって新たな視点が導入され、発話機能や非言語行動も視野に含めた分析も行われている。

研究における分析の枠組みだけでなく、社会における人々の待遇意識やコミュニケーションストラテジーにも、経年的な変化は起こっている。たとえば、30年前と現在を比べた場合、「親しみをこめて話しかける」ということが対人配慮や待遇行動においてどのような位置を占めているか、人々にどのように意識されているかは、少なくとも異なるはずである。

そうした状況をふまえて、敬語と敬語意識の経年調査を実施し、その結果から実りある知見を導く上では、具体的な調査の企画・立案に先立って、いくつかの基本的なことがらをあらためて問い直す必要がある。ここでは、「敬語」に対する意識のありよう、そして敬意・配慮の表現行動の広がりの中における敬語の位置づけ、という二つのことに関して話題を提供し、議論の糸口としたい。

## 2. どんな言葉遣いを「敬語」と考えるか？

筆者は現在、大学生を対象とした面接調査を秋田・東京・大阪で行い、言葉の使い分けについて尋ねている。

その中でよく耳にするのが、「友達とはタメ語だが、先生や目上の人には敬語を使う」という発言である。そこで、「敬語」というのは例えばどのような言葉かと尋ねると、「行くの？」はタメ語で、「行きますか？」が敬語だという。「いらっしゃいますか？」については、さらに丁寧な言葉で、普段はまず使わない（人によってはバイト先などでは使う）という答えが多い。

また、ある女子学生が、「うちのお母さんはケータイメールだと、私にも敬語しか使えない」と述べたことがあった。驚いて、「例えば、どんなふうに？」と尋ねると、答えは『今日は夕飯、いるんですか？』とか、『分かりました』というふうに」ということであった。

こうした回答を聞いていると、現在の大学生の年代にとって、「敬語」の主たるイメージは「です・ます調」なのであるか、という疑問がわく。「です・ます調（＝丁寧体）」は、確かに普通体に比べれば丁寧な形式である。しかし、「です・ます体を使う」ことを「敬語で話す」こ

との代表例とする感覚は、おそらく現代の中高年世代の人々とは異なるものであろう。また、前回の岡崎調査が行われた30年前の大学生世代の人々とも異なる、「敬語」のイメージなのではないかと思われる。

前回の岡崎調査に、以下のような質問項目がある。

「あなたは目上の人と話をするとき、うまく敬語が使えますか。」

例えば、こうした質問を、単純に現在再び各世代の回答者に発したとしたら、「敬語を使う」という質問の表現に対して思い浮かべる「敬語」の語形に開きが生まれる可能性が十分にある。

また、次のような質問もある。

「お宅では家族の方の間で、敬語を使うことがありますか。それとも家族どうしでは、敬語は使いませんか。」

この質問に対して、上記の女子学生はどのように答えるであろうか。アンケートであれば、母からのケータイメールを思い浮かべながら、彼女は「使う」にマルを付けることであろう。そして、その回答を見た調査者は、自身のイメージする「敬語」の使用として受け取るかもしれない。

すなわち、「敬語」と簡単に質問しても、それが何を回答者に想起させるかは、場合によって異なるということである。また、同じ「です・ます調」であっても、それを使う話者がどの程度の待遇行動を意図あるいは意識しているかは、時代によって、あるいはそのときどきの年代によって、決して一定ではないということである。そして、同じ時代の異なる年齢層における異なりは、30年前よりも現在のほうが大きいのではないだろうか。敬語や敬語意識の調査において、「敬語」という用語一つにしても、安易に扱うことはできないことを痛感する。

何をもち「敬語」ととらえているのか、特定の言語形式がどのような待遇的な重みや働きを持っているのか、それをストレートに意識として問うのか、あるいは具体的な場面における行動を問うことで間接的に割り出していくのか、それはこれからの判断次第になるであろう。しかし、現代の日本語話者たちにとって、「敬語」がどのようなものとしてとらえられているか、そこに帰属させられる言語形式にどのようなものがあるか、そしてそれが回答者の属性によってどのように異なるかを明らかにすることは、今、このときにおいて敬語を対象に行う調

査, およびそれに基づく研究にとって, 正面から向き合うべき課題である。

### 3. 敬意・配慮の表現における敬語の位置づけ

もう一つの問題として考えたいのは, 狭義の「敬語形式」の使用・不使用(あるいは選択)といった, いわゆる「言葉の形」は, 人への敬意や配慮を言語表現によって表すという行動全般において, どのような位置づけにあるのか, ということである。

言語行動を行う際には, どのような形式の言葉を使うかということのほか, 「どのような働きかけを」「どのような順番で」行うかといったことも, 相手への配慮や敬意を表出する重要な手段となる。

言語行動(依頼, 断り, 説得, など)の遂行においては, 目的を円滑に達成する上で, 相手の感情を考慮した調整や, 場面状況への配慮も必要となる。そのための手当てとしても敬意や配慮の表出が必要となるが, それはいわゆる「敬語」の使用や狭い意味での「言葉遣い」だけでは十分でなく, どのように話を進めるか, 例えば, 依頼の際に恐縮の気持ちを述べたり, 依頼するに至った理由や事情を説明したりするか, あるいはそれらをどのような順序で言うか, といった, 「働きかけの仕方」とでも呼ぶべきことによっても支えられている。

言語行動を働きかけ(発話機能)の連なりとして, すなわち, 「どのようなことをどのように(いくつぐらい, どの順で)言っているか」を見るという分析からは, 働きかけの連なり方が話者の年齢層によっても, 場面や相手に基づく状況の種類によっても異なり(熊谷・篠崎2006), 用いられる敬語レベルとの関係にも一定の傾向が見られることが報告されている(熊谷1995)。こうしたことから, 言語行動における働きかけの構成の仕方が一種の待遇表現として重要な役割を果たしている可能性が示唆される。

相手への配慮や敬意の表出は, 少し視点を広げてみるだけで, 話し言葉に限られないことが分かる。書き言葉においても, 言語形式の選択はもちろんあるが, ここでは書き言葉に特有のこととして, 文字(表記)の選択を考えてみたい。

日常, 私たちは書き手として読み手を配慮して文字を選ぶことがある。例えば, 相手の名前を書く場合, 「オザキ」という苗字を「尾崎」と書くか, 「尾崎」と書くか。そこにはおそらく, 書き手自身の好みを超えて, 相手がその表記をどのように受け入れるか(例えば, 「自分の名前のサキは『崎』なのに, 『崎』と書かれた」と機嫌が悪くなる, など)ということがあり得る。そうした配慮は, 相手が違和感, ひいては不快感をいだくことがないように自分の言語表現を調整するという点においては, 敬語

の選択とも通じるものと言える。

文字の選択行動は, 時には書き手自身のアイデンティティの表出とも関わってくる。「自分の年齢や立場としては, この単語は平仮名でなく漢字で書かない」と感じるとか, くだけた調子でメールを送る際には, 遊び感覚で, 正書法とは異なる文字遣いを意識的にする, などといったことは, 日常よくあることであろう。

このように, 数例を見るだけでも, コミュニケーションにおいて敬意や配慮を表出する上では, 実に多様な手段が存在することが分かる。そうした各種の手段の中で, 敬語形式を用いるという一手段はどのような意味合いや位置づけを持っているのであろうか。第三次岡崎調査においても, そうしたことを少しでも明らかにするために, 調査方法を工夫し, 質問項目を検討することが重要な課題となるのではないだろうか。

### 4. まとめ: 今後への問題意識

敬語や敬語意識に関する調査においては, まず, 「敬語」というだけで万人が同じイメージを抱くという発想に疑いを抱くことから始める必要がある。イメージの異なりはいつの社会でも存在したことであろうが, 30年前に比べて現在はよりその多様化が進んでいるのではないかと思われる。また, 「敬語を使う」ということが, 現代のコミュニケーションにおいて, ほかのいくつかの主要な対人ストラテジーとの関係でどのような位置を占めるかを明らかにすることもまた重要であろう。

#### 参考文献

- 熊谷智子. (1995). 依頼の仕方 —国研岡崎調査のデータから—. 日本語学 14-11.
- 熊谷智子・篠崎晃一. (2006). 依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差. 国立国語研究所. (2006). 言語行動における「配慮」の諸相. くろしお出版.
- Brown, P. & S. Levinson (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

#### 付記

本稿で言及した面接調査結果は, 平成18年度科学研究費補助金(基盤(C))「三者面接調査における回答者間相互作用のバリエーションに関する研究」(課題番号18520346 研究代表者:熊谷智子)の成果の一部である。

連絡先 熊谷智子 〒190-8561 立川市緑町 10-2  
国立国語研究所 tkuma@kokken.go.jp